

# 露

絵／石阪 春生

## 鈴木 漠

露 といえは

はかないものの喩え

露の世 露のいのちなどは常套句だろう

だが 見よ

朝日の昇る前のくさむらで

清浄無垢に凝る露の玉を

一顆の露には

風景のすべてが映つてもいるのだ

非命によって

幼い子を天に召された母親の

または 母父を喪つた少年の

まなじりに溢れ出る涙の粒

その悲しみの器

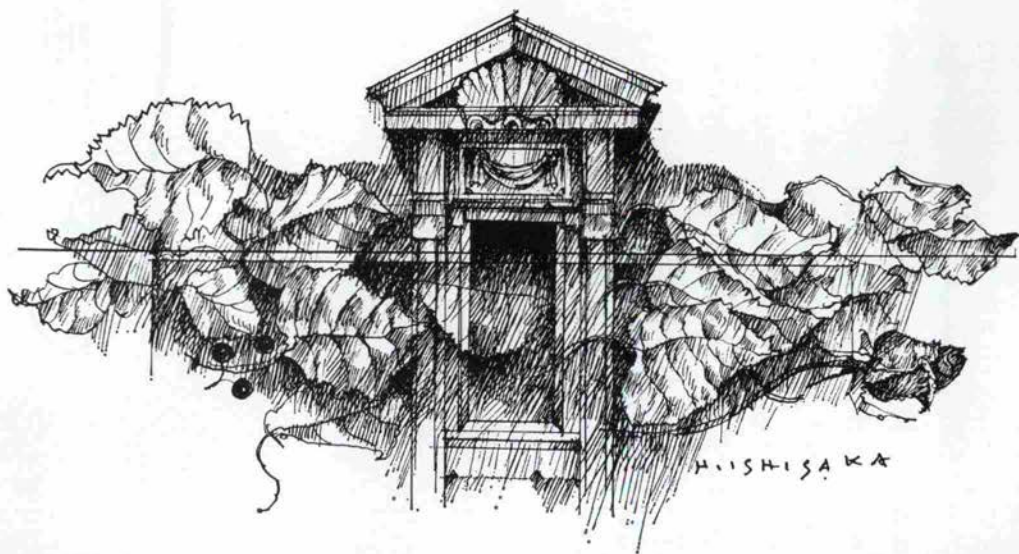
一滴の涙には

人生のすべてが滲んでもいるのだ

想像せよ

広大無辺の宇宙を宿す

露の奇跡を



# よみがえれ美しい神戸



## 共に歩いて

## いきましよう

落合 恵子 （作家）

「書棚はほとんど倒れています。神戸在住のスタッフとは連絡がとれません」

東京で暮らす私の一月十七日の朝は、そんな電話で破られた。

電話をかけてきたのは、大阪江坂で五年前にオープンした子どもの本の専門店クレヨンハウスの責任者である女性である。彼女は奈良に住んでいて、どうにか店まで辿り着いたが、どうしていいかもわからないまま電話をしてきたのだった。

東京の私たちにわかってのことといえ、とにかく酷いことが起きてしまった、ということだけだった。

神戸在住のスタッフが無事であったことがわかったのは、二日後のこと。

「しばらく店は閉めましようか」

飢えて泣く子の前で、文学は何か可能か……。サルトルのそんな言葉が頭をよぎる瞬間があった。こんな時に、本がなんになるのか、と。しかし私たちは、店を開け続けた。東京店も大阪店も、書店業務は開店休業状態。私たちのささやかな呼びかけに応じて、お客様が次々に運びこんでくれる支援物資を種類ごとに分類し、代送する作業が私たちの仕事になった。作業は二か月近く続いた。

「この作業を通して、私たちはほんの少し落ち着きを取り戻すことができたような気がする。それぞれが、自発的に、いま自分に何ができるかを考え、実行している姿に接することができて嬉しい」



へおちあい・けいこ」執筆と並行して東京青山と大阪江坂に、子どもの本の専門店クレヨンハウスと女性の本の専門店ミズ・クレヨンハウス主宰。月刊「子ども論」、「音楽広場」発行人。最近の主な著書として、「あなたの庭では遊ばない」、「誰と暮らす」、「生命(いのち)の感受性」、「五〇歳のわれらの戦後」(佐高信氏との対談)など。週刊「金曜日」編集委員。

しかし、すべてはこれから。

自らも被災者である大阪店のスタッフは、そう述懐する。運ばれてくる衣類はすべてきれいに洗濯された清潔なものばかりだった。

「いまはまだ本を見に行く余裕がありません。でも、子どもたちと必ず行きます。開いていることを確かめたくて、電話をしました」

神戸の幼稚園の先生から、そんな電話が入ったのは、二月の第一週が過ぎてから。保育者や詩人や音楽関係者と、ささやかな支援コンサートを開く話が具体性を帯びてきた頃だった。三月。東京で開かれたコンサート会場には、遠く北海道や沖縄の人たちからのメッセージや義援金が寄せられた。

それぞれの「いま」の中で、それぞれの私たちは、「私に何ができるか」を、これからも問い続けていかなければならない。ここ数年語られてきた市民のネットワークの意味と内容を、言葉を越えて、より確かな行動にするためにも。これから特にセラピーの視点を、いかに現実の暮らしに生かしていくかも大事なテーマになるだろう。このところ、私の中で繰り返し鳴り響いている言葉がある。ポストンにある救援センターの壁にあった言葉である。

……私の前を歩かないでください。私はあなたの後を、ただついていくことはできないでしょうから。私のうしろを歩かないでください。私はあなたをリードすることはできないでしょうから。どちらかが、どちらかの前や後ろになるのではなく、共に歩いていきましょう。



# アップルクーヘン

Apple Kuchen

愛のシンボル、リンゴをまるごと1個。  
甘い二人のハートに包んで、幸せを築きます。



化粧箱入り ￥1,600



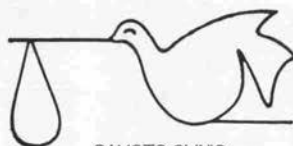
株式  
会社

本 社 〒651-21 神戸市西区北別府2-1-2  
TEL.(078)974-9756 FAX(078)974-9758  
大阪営業所 〒558 大阪市住吉区河田町7丁目12-19  
TEL.(06)697-9435 FAX(06)697-4188

東京・名古屋・大阪・神戸

北 欧 の 銘 菓

2-ハイム・コンフェクト



SAMOTO CLINIC



ママといっしょに



赤ちゃん: 山内 <sup>まみ</sup> 麻未ちゃん (平成7年6月8日生まれ)

お兄ちゃん: 康平くん

パパ: 利昭さん ママ: 静代さん

「二人共、やさしくって明るい元気な子に育ってね」

★佐本産科・婦人科★

佐本 学

神戸市兵庫区中道通 4-1-15

☎078 575 1024(病室)☎078 576 9639)

市バス上沢4停南スグ

●駐車場完備●

□私の意見

# ハイカラ博で 復興への勢いを

太田 敏郎

〈国際港都・神戸復興展実行委員長  
ノース代表取締役会長〉



神戸の企業がそろって自慢の商品をポートアイランドの神戸国際展示場に持ち寄り、十一月三日から五日まで、「ハイカラ博」を開くことになりました。大震災から不死鳥のごとく美しくよみがえる神戸の元気なところを多くの人たちに见てもらい、これまで神戸に寄せられたご支援に感謝の気持ちを表したいと考えています。

復興へのはずみは、人の行き来が盛んになることだと思えます。神戸ほどいい街は世界中にもそんなにないという評判でした。山、坂道、港、異人館、たくさんの外国人、エキゾチックなたたずまいのお店、世界中の料理、センスのいいファッション。そんなものがいったん失われてしまいました。私たちは再び取り戻し始めています。ハイカラがよみがえり始めているのです。それを多くの人々に来て見てもらおうという訳なのです。

以前から神戸はまとまりのいいところだと言われて来ましたが、今回の「ハイカラ博」の実行委員長になって改めてそのよさを痛感しました。私たちの呼びかけに応じて、非常にたくさん企業が参加を申し出て来られました。ブースを二〇〇小間予定していたのですが三〇〇小間を越える希望があり、何とかやり繰りして二八〇小間を確保しました。主催者としてはうれしい悲鳴というところです。

ネーミングがとてもユニークだと好評をいただいています。若い人たちに焦点を当てようとは考えていたのですが、ハイカラというのは、お年寄りには分かって、若い人たちにはどうかという不安がありました。ところが「レトロぼくって新鮮だ」という声を聞きます。これが神戸なのです。古いものを大事にしながら新しい冒険をする、そんな気風がこの街にあります。私も海軍の経験がありますが、やはり世界を舞台にした港町のよさが震災に負けないで生かされているのだと思います。海外からの出展希望も殺到していて、調整に苦労していますが「ハイカラ博」が復興へ向けて高らかに鳴り響くラッパになるよう、成功へ向けて努力して行きます。



(あさい・のぶお) 1935年新潟県生まれ。東京外大卒。読売新聞ワシントン支局長など海外勤務十年以上。米国ジョージワシントン大、三菱総合研究所などの客員研究員を経て87年から現職。著書「アメリカ50州を読む地図」「民族世界地図」ほか。横浜市在住。

## ■浅井信雄対談シリーズ〈15〉

# 都市で暮らす責任を知る

浅井

信雄

△神戸市外国語大学教授▽

高見

裕一

△衆議院議員・新党さきがけ▽

浅井 高見さんは永田町の元氣印と言われていますが、そういうタイプの政治家になろうと最初から考えていたのですか。

高見 いや、自分としてはオーソドックスな、いわゆる政治家としての政策立案の仕事を中心に行おうと思っていました。ところが、あそこの現状を見ていると、とてもじゃないけどおとなしくしとれんな、というところがあります。九月にタヒチに行ったことを「軽々に大蔵大臣が行くものじゃない」「国会議員がバフォーマンズをするべきではない」と言われる方がありますが、わたし

は、新しい政治家の姿は、どんどん行動して前に出て、国民的な支持があることにはちゅうちよなく自分の身体を使って表現する、それをバフォーマンズと言うなら言えという気持がありますね。

浅井 国民の政治への関心を喚起することが重要な課題になっています。民主主義の基本ですから。それに、日本に何が必要なのか、ということ考えたときに、かなり大胆に改革しなければならないということが総論としてある。

高見 わたしは、公共事業チェック機構を作る議員の会





(たかみ・ゆういち) 1956年神戸市生まれ。追手門学院大中退。日本リサイクル運動市民の会代表。財団法人緑の地球防衛基金理事。93年兵庫1区から衆議院議員当選(日本新党)。94年新党さがけ入党。衆議院災害対策特別委員会理事。著書「官邸応答せよ」など。

を作っています。いま日本のお金は、道路に五年間で七十六兆円、下水道に十七兆円使われている。ところがお金の使い道というのは、各省別に決まっていって、建設省はそのうちの六八%。その率は毎年〇・一%も動かない。残りの二割強が農林水産省、残りが運輸省。環境庁がほんの爪のアカ程。建設省の中でも、都市局にはいくつ、河川局にはいくつ、課、係に至るまで率が固定されています。これを変えることは至難の業なんです。

例えば長良川の河口堰のように、三〇年前に決まった計画が見直されることなく莫大な費用が投下されているが、実際は水を使うあてがない。でもいろんな理屈をつけてやるんです。やめて、例えばマルチメディアに、福祉に、教育に環境にベンチャービジネスになぜ投資できないのか。そんなことやってる暇があったら神戸の復興に投資してくれと言いたいところですが、それは許されない。省庁別の利権がガチガチに固まっていって、そこにかかる族議員というのが何百人もいて、予算の枠が動かない構造になってしまっているからです。

浅井 金融のごたごたや規制緩和にしても、困難が生じてくると小出しに対応を取る。効果がないとまた小出しにやるということの繰り返しなんです。どこかでその連鎖反応的なものを断ち切らなくては長期的に日本のプラスにならない。そういう議論は永田町では通用しにくいのでしょうか。

高見 難しいところです。永田町で通用しにくいのか、わが国で通用しにくいのか。族議員を選出するのをやめてくれないかと有権者に言いたくなります。汚職、賄賂で捕まった議員をなぜ選挙で通すのか。有権者も実は問われている。

浅井 確かにそうだが、有権者もゆっくり変わりつつあるのではないか。連立政権の誕生、参議院選挙、地方選挙を通して無党派層がものすごく増えたのは事実で、これが新しい時代の兆候ではないでしょうか。

高見 単に政治に対する無関心層が増えたのではなく、積極的なレジスタンスであるんだという、そういう無党派層、棄権層であるように願っていますね。

## ★永田町・霞ヶ関では「震災は終わった」

浅井 高見さんは、神戸の被災地から永田町、官邸に向かってしきりに電話で機関銃を撃っていたということになっていますが、そのアビールに対して具体的な反応はいかがでしたか。

高見 鈍い以前の問題です。例えば、五十嵐官房長官個人は大変心配を下さり、死にもぐるいで何かをしようという意志が電話の先から伝わってきた。たぶん村山首相も同じだったと思いますが、現実の機構というのは何ら動かなかった。特に防衛庁に電話をしたとき、県からの申請がないと出動できませんという一点張り。



高見 裕一さん

私は自衛隊の出動要請をしたことが間違っていればバツジを返上するから、出してくれと頼んでも、相変わらず県知事の要請がないとできない、という返答でした。

浅井 いま、新党さきがけの大震災復興対策本部長をなさっている。被災地の復興は非常に微妙な段階で、区画整理などの、特に土地に関連した復興事業になると、ものすごく反発も出るし調整が困難になる。こういう状況を見て、復興というのは基本的にどうあるべきなのか、その辺の哲学はいかがですか。

高見 まさしく哲学の問題だと思います。国の方から言う、すでに阪神大震災は終わったという風潮が永田町にあり、より強く霞ヶ関にある。神戸は裕福な自治体で

あったじゃないか、ここまでやれば神戸の人は自力で何とかやるだろうという声があることも事実です。震災半年目の神戸新聞の社説を切り抜き、二千部印刷し、全国会議員、霞ヶ関の上級官僚に送ったところ「まだこんな状況なのか。よくわかりました」という反応が、五、六〇件ありました。逆に言えばそれをやってなければどうなっていたのか、ゾッとします。

浅井 その反応は国会議員ですか。

高見 国会議員は二〇人もなかった。多くは官庁の上級管理職でした。

浅井 そういう人たちがどうしてそういう反応なのか、現実をきちんとフォローしていないのでしょうか。

高見 フォローしていないと同時に、永田町も、霞ヶ関も忙しいところなんです。分刻みというのはこんなものだというのが分かったのは国会議員になってからです。ものを考えている暇がない、そういう環境にさらされていますと、去る者日々に疎しになってしまふ。官庁は目の先のことと振り回されています。

浅井 そういう現実があるとすれば、彼らに現在の神戸の状況を知らせ、理解してもらうために、被災地からの発信が大切ですね。

高見 どんどん発信して貰いたい。でないと忘れられてしまふ。阪神大震災の復興というのは、国民が国家に対して忠誠心を持ちうるかどうか、日本人として安心していて良いのかどうかということが問われている。

浅井 被災地から永田町に具体的にどのような発信が必要だと思いますか。

高見 例えば神戸市長、兵庫県知事からの手紙とか、神戸復興事業にまつわる報告委員会というのを市民が作り、復興レポートを毎週議員や霞ヶ関に対して無理矢理送りつける。国会議員の事務所に送っても読んでくれないことが多いから、宿舍、個人宅へ送りつける。例えばですけど「神戸っ子」はそういう編集チームのキーマンに十分なり得るのではないでしょうか。



浅井 被災地の問題について連立与党の中で意見は一致するのですか。

高見 議論があります。連立与党の中ではなく、地域です。それと、野党が野党でないというのが非常に辛いところ。野党が、行政の作った枠組みの中でしょうかのを言わないんです。いつでも政権交代可能ということアピールしたいと思うから、行政の言うことに根本的な疑問を呈さない。行政の側が引いた線は越えないという質問では本当にインパクトのある質問にはなりませんね。

議員のことでいえば、例えば神戸市議会の議員が陳情に來られても、認識レベルが低いことが多く、取り合っ



浅井 信雄さん

てもらえないことがあります。市会議員さんは地元で陳情回数を誇っておられますがあれでは駄目ですね。

浅井 具体的にどんな陳情が問題ですか。

高見 すでに政府、与党内で議論が済んでしまったことばかり持ってこられる。中央の動きが地方で分かっているのではありませんか。あれもこれもというのではなく、優先順位をはっきりさせて計画を立ててほしい。勉強不足も見られます。例えば、海外住宅の輸入を促進したいから関税を下げるといっても、そこに至る過程の提案が全くない。海外から建設技術者を招きたいから規制緩和をしろと言われているが、どういう技術を持った人が何人いるのかということが分からないと国の許認可はおりな

い。兵庫県には二万数千の職員がおり、神戸市にも一万九千五百人の職員がいる。それだけの自治体が審議に耐える具体案を出せないのが残念です。

浅井 陳情のやりかたは重要だけど単純です。被災地はたくさんあるのを国にやって欲しいが、何でも国が出来るものでないというのも事実です。

高見 地域が主体的に自分たちはこうするんだという明確な意志表示をしないと国もまた動けない。それも事実だと言うのを理解して貰いたい。市民感情を国に訴えることも大事ですが、市会議員はそれをどう具体化していくかを勉強してもらいたい。地震後七日目に西神のホテルに市会議員が一〇人ほど泊まっていたのには驚きました。聞くと、いま被災地に行ったら陳情を聞かされ、責められるだけなので、いまは地元には帰られへんねんと言っていました。わたしが避難所めぐりをしていると市民から「初めて議員の顔を見た」と言われて、この地域の市会議員は何してたのかと思いますね。

浅井 そこが高見さんの高見さんたるところですね。

高見 本場に現場主義の議員が少ないので驚きます。震災後、二カ月経って東灘のある避難所に行ったのですが「お前、今ごろきやがって」と言われましたが、わたしも体は一つ、わたしにとってここは百番目なんですと言っても聞いてくれない。

浅井 当時の被災者たちはビリビリしていましたね。わたしもあちこちの避難所を訪ねたが、入るときにはものすごく神経を使いました。

#### ★都市に住む市民のルールを確立

高見 復興のことで言いづらいことは、市民と行政が対立の構造になってしまったこと。これは多くは市が悪い。しかし、市民の側にも責任はある。そのことをメディアが言わないのは非常に悪い。

浅井 都市計画の決定は震災後二カ月以内という期限が決められて、それを出すと猛烈な反発が起きた。これは

一種のたたき台だという含みで出せば良かったのに、これをのめと行政が押し付けた、と市民の側が受け取ってしまった。あれはまずかった。

高見 神戸に限らず、行政の側に市民不信というのが明確にあります。「行政―お上、お上―市民より一段上」という意識が行政の中に明確にある。

浅井 今まで神戸市は、街づくりに自信を持ってきた。そういうことも関係しているのでしょうね。

高見 そうですね。ただ、時代の変化について行っていない。とにかく高層集合住宅を作ろうとする。「効率中心の街」はだれも望んでいないのに、望んでいると錯覚したのが大きな間違い。錯覚した理由は、二、三〇年前に作った計画をそのまま出そうとしたこと。急がないと彼らがモノを考え始める、考える暇を与えずやつつけよう、これが行政ですから。

浅井 彼らというのは市民ですか。

高見 ええ。行政の欠点もありますが、半面、市民の側も公共とは何かという意識がなさ過ぎた。それは都市に住む市民のあるべき姿ではありません。

浅井 都市に住むというのはそれなりのルールがあるが、その認識が少し欠けていた感じがする。

高見 一戸建ての大きな家に住むなら郊外へ出る、都心に住みたかったらマンション、アパートにしか住めないけれどそのかわり、あらゆる情報、文化の利便を受けて住むことが出来る。これは都市に住むメリットとデメリット。世界の都市全て同じです。都市規制が日本ほど緩いところは無いですよ。権利ばかりが前に出て、義務がなおざりになっている。いまの民主主義状況を象徴的に表した出来事だと思います。

浅井 とくに公共の認識の問題ではよくある話ですが、自分の庭のゴミを道路に掃き出す、道路が公共の財産だとは考えない、というのが問題の核心を突いていると思います。

高見 民主主義とは好きなことを勝手にしてええこつち

やと思っている人が多い。政治家してみてよく分かりました。

浅井 高見さんはリサイクル運動から地球環境までエコロジー問題に深くかかわっておられますね。

高見 私が議員になった意味はそれなのです。武村正義氏から「地球環境待ったなしやから助けてくれ」というラブコールをいただいで出ました。そこをやる政治勢力作りが夢なんです。そこに行く経過ポイントとして民主リベラルという政治家グループ作りを考えています。少なくとも反利権、非宗教、多様な価値観を認め、目先の利益誘導政治に堕落しないために自民や新進ではない政治勢力が必要だと思います。

浅井 環境問題は目に見えにくいので政治家の将来を賭けるのはなかなか困難だと思いますが。

高見 環境問題は人の心をつかみにくい。ほとんどの人は目先の利益を追うんですね。「あんだ、地球をこのままにしたら二〇年後に死にまっせ」と伝えても「死ぬ二〇年後やろ、そんなことより今の給料が問題やねん」と言われたら返す言葉がなくなる。

浅井 人間は理性を排除することがあります。被災地の復興にしても「元と同じ街を作ったら危ないんだよ」と言っても、一部の被災者の方は「危なくてもいい、昔から住んでいた所にいたい」と言われると、これに對抗する論理はないんです。

# ★みんなにある世界を作る責任

高見 ある街づくりの座談会に出たのですが「お前らがこんな大きな公園作ると言うから家を建てられなくなるんじゃ」と怒っている人がいる。市の担当者に公園の大きさを聞くと〇・八ヘクタールだという。防災公園としてはちっちゃなものです。どてら、ステテコで歩けるような街がええんやと言う。大きな道路一本、公園一つあれば火が止まり、たくさんの人が焼死せずにすんだのになぜ分からないのかと問うと「地震はもう当分ない」と





地球環境、震災復興で議論する高見、浅井さん

言う。むちゃくちゃですよ。気持ちには分らないではないのですが…。私も以前、区画整理で二五％を提供し、建て直しましたが、おかげで母は、家の倒壊による死から逃れることが出来た。街は住民の協力がなければ作れないし、減歩がいやなら街に住むべきではない。街は公共の、グローバルな資産なんですから。

浅井 日本人が土地にこだわるというのも分かりますが、土地を中心に全てが回ってきた国ですから一種の宗教、「土地真理教」なんですよ。しかし、これだけの犠牲が出たので土地に対するこだわりはかなり変化してきていると思う。土地に関わる改革は戦争、クーデター、革命でもないやりにくかった。震災だってそれに匹敵するようなチャンスだと思う。

高見 私もう思うのですがそれを言うとも市民の感情的反発もある。辛いところですね。

浅井 公開の場で区画整理の話をすると何を言っても反発を買う。それぞれ事情があるので当然なのでしょうが、目先のことで判断するのか、将来のために判断するのかそこが大切だと思うのです。

高見 民主主義は自分たちの世界を作る責任を自分が負っているということ、これを忘れてはいけません。浅井 タヒチへ核実験抗議に行かれ、フランスから反発を受けましたが、私はそれでも良いと思っています。しかし同時に日本はフランスとの関係を感情的に

こじらせてはいけないというのが事実です。例えば日米自動車問題でアメリカが数値目標を追って来たとき、フランスを含めたヨーロッパの国々は日本を支持した。今回も日本政府は、フランスに特使を派遣して核実験に抗議すると同時に、今後の友好関係を壊さないように話し合ってきたことは良いことだと判断しています。対外関係は、ひとつのことでワツと走ると非常に危ない。いろんなところに目配りしながら進めていかなければならないと思います。

高見 その言葉をフランスに投げかけなくてはいいかと思う。世界市民の世論の反発をここまで受けても強行しなければならぬ実験なのか。人間の倫理観は進化するものだと思うのですが、戦争、武器輸出が犯罪であるという時代を招き寄せなければならぬ。そのために政治も市民も努力しなければならぬ。いまこそ国対国の哲学を競う日が来たのではないかと。国が持ち合わせている哲学を、人類サバイバルへの向けて討論する日が来たらいいかなと受けておきます。

浅井 そういう方法でうまくいくとお考えですか。日本の政治については高見さんは悲観的でしたが、わたしは国際政治に悲観的です。フランスには「みんなに賞賛されながら死ぬよりは、悪口を言われて生きていたい」という気風が原点にありますね。マキャベリズムと言ってもいいような考えが…。

高見 マキャベリズムの権化みたいなものです。差別思想がヨーロッパの国の中でも群を抜いて激しい国ですから、今回の行為の底にも脈々とある。ですがそこであきらめてしまうと厭世感の塊になる。人々を厭世感の塊にさせないのが政治の仕事とと思っているので、私はどんな状況になっても核実験反対、地球環境の改善と保護を言い続けたいと思います。

浅井 永田町に対してでも有権者が厭世感を持たないように配慮をいただきたいですね。

〆九月十九日、六甲荘で〆



第7回 兵庫のまつりーふれあいの祭典

# ふれあいフェスティバル '95

“大好きなまちだから

もっと・・・ ひょうご”

10月28日(土)・29日(日)

共に 10:00～

県立明石公園

サンテレビ生中継

10/28(土)13:00～16:00



## ■ふれあいカーニバル

[10/28(土) 13:00～16:00・陸上競技場]

- ・総合プロデュース 内海 重典(宝塚歌劇団名誉理事・演出家)
- ☆「五木ひろし “ふれあいコンサート”」
- ☆兵庫県警察音楽隊、須磨ノ浦女子高等学校等によるマーチング
- ☆武庫川女子大学体操部の体操演技
- ☆島根県の石見神楽などの伝統芸能
- ☆神戸中華同文学校による中国龍おどり ほか

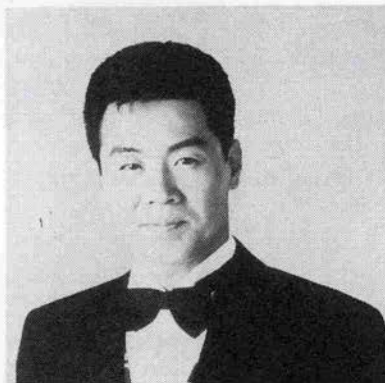
## ■ふれあいステージ

[10/28(土)10:50～16:00 10/29(日)10:00～16:00・西芝生広場特設ステージ]

- (10/28) ☆宝塚音楽学校生徒コーラス
- (10/29) ☆高石ともやフォークライブ ☆お母さんといっしょ(NHK)・にこにこふんショー(両日) ☆伝統芸能 ☆子供たちのモダンダンス、ジャズダンス ☆リサイクルオークション
- ☆県立西宮、須磨東高校演劇部の震災テーマ創作劇など



にこにこふんショー  
©NHK-ED、NHK-SW、  
スタジオジャッポ



五木ひろし

## ■ひょうごフェニックスブラザ

[10/28(土)・29(日)10:00～16:00・西芝生広場]

- ☆もっと・・・ ひょうご館
- ・復興ビジョン映像や復興ビジョンパネルの紹介
- ☆復興シンボルフラワーモニュメント
- ・未来への希望にみちたフラワーモニュメント
- ☆HYOGO AID'95 by ART (阪神・淡路大震災復興オリジナル作品展、ポスター展)
- ・原画展 10/28～10/31・明石商工会議所7Fホール
- ・ポスター展 10/28～10/29・西芝生広場
- ・横尾忠則、白髪一雄、元永定正など日本を代表する著名な画家等の「復興」をテーマとした原画展とポスター展及びポスター販売会

## ■第17回兵庫県民農林漁業祭

[10/28(土)10:00～16:00 10/29(日)10:00～15:00・第2野球場]

- ☆ふるさと物産フェアコーナー (試食・試飲コーナーもいっぱい!)
- ☆農林水産業再発見コーナー など

## 交通案内

●JR西日本「明石駅」下車スグ ●山陽電鉄「山陽明石駅」下車スグ

※会場には駐車場がありませんので、ご来場の際には必ず電車・バスをご利用ください。  
また、会場内では大変な混雑が予想されますので、二輪車でのご来場もご遠慮ください。

## お問い合わせ

ふれあいの祭典実行委員会事務局

☎ (078) 341-7711 (代)

神戸市中央区下山手通5-10-1 兵庫県第2号館



# 市民と共に生きていく

## 三田市立図書館の魅力

嶋田 勝次 △関西学院大学教授▽

ている。

時々この図書館へ出掛けるが、いつも通う大学への乗換駅の神戸電鉄横山駅のすぐ横に立地しているので、便利などころでもある。

先日家の引越し準備のため年賀状の整理をしていて、畏友故増田正和氏のものが出てきた。それはこの図書館の広場に設置された氏の彫刻の絵葉書であった。

この彫刻の題名が「出会いの座」とあったので、出会いの気分いっぱいになったのは、やはりこの石のさぶとんにすわって豊かな気分ひたっているからかなあ？と思いつつも、もう少し夕暮れになって飲みものでも持参していればと思った。そしてここでのんびり語り合っていることがよい供養になっているのではないかと勝

手に思っている。

この図書館の設計監理は日建設計の由だということだけに一安心して見学できるし、利用させてもらえると思っている。

建築は一、二階建の寄棟の単純な屋根の形をしていて、奥に展示ギャラリーを持つものである。

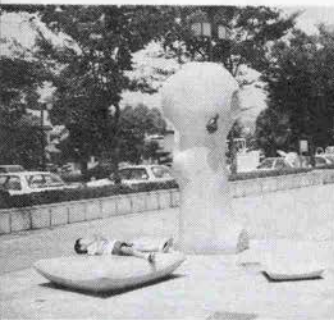
室内はほとんど一般開架書架と児童開架コーナーから成り立っていて、広く明るい空間構成になっている。

先日この図書館年報の平成五年度版をいただいた。ここの開架書庫が十萬冊収容可能とあったが、それよりも平成四年五月に延べ貸出冊数百万冊達成とあるし、その前年に第七回日本図書館協会建築賞優秀賞を得ている。もっと見ていると、平成六年一月には延べ貸出冊数二百萬冊達成とあるから、市民の図書館活動の魅力はどこから生まれてくるのだろうかと思つた。

図書館は市民と共に生きていく、といつても、どう利用されているか。土曜日と日曜日の屋下がりへのんびりと訪ねてみた。もう利用者いっぱいであつただけではなく、増田先生の彫刻に子供がたわむれて楽しんでいたり、でんでん虫が高いところを動いている様子を子供が注目している姿を見て嬉しくなつた。



三田市立図書館 日本図書館協会建築賞優秀賞を受賞。コミュニティ施設として市民に愛されている。

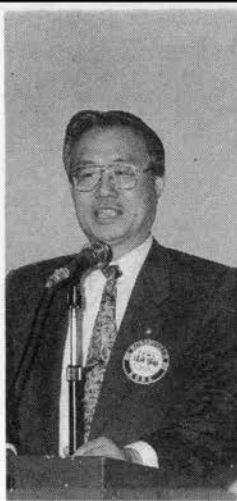


増田正和作「出会いの座」  
石のさぶとんに寝ころぶ子供には、  
どんな出会いが待っているのだろう

# 神戸へ見学

## みんなで招こう

あの日の朝、支店長室から見た光景は何とも悲しいものであった。視野に入るほとんどのビルが崩壊…。そして数カ月を経て秋風が立つころ、オリエンタルホテルの取り壊し作業が始まっている。これで旧居留地のビル解体は終わるのであるが、ここが昔日の賑わいを取り戻すのは果たしていつのことであろうか。いずれにせよ街全体を含め、復興に大変なエネルギーが必要なことは改めて感じざるを得ない。



＜日本銀行神戸支店長＞

遠藤勝裕の

ではこの復興へのエネルギーの具体的な中身は何であろうか。これはヒト、モノ、カネに尽きるが、提供者は国や県、市等自治体であるのは当然ながら、忘れてはならないのが我々市民全員である。ただ昨今の議論をみていると各々が自らの立場を守る論理のみをまず優先しているように思われてならない。

先日の神戸新聞に「新幹線もあるし空港もある。過疎地に比べれば神戸のインフラはもう十分」といった国の発言が載っていたが、これなどはその典型であろう。街の活性化はハード面のインフラ整備のみによるものではなく（これとてまだ不十分だが）、そこで生きる人達の生活基盤の確立が不可欠であることは論を待たない。ソフトの充実、回復を急がなくては復興は

### 経済復興へのキーワード／連載3

おぼつかない、ということであり、そのためには国を含めた当事者全員が復興へ向け具体的に動く、参加する姿勢を示すことが大切である。そうした姿勢がソフトの回復を早め、悪循環的な縮小不均衡に陥りつつあるこの街を救うことになろう。

国や自治体はともかく、市民レベルでの復興へ、というところ「そんな難しいことは偉い人達に任せよう」との声が出そうであるが難しく考えることはない。誰にでもできるのである。例えば神戸に人を集めること、これなどは「観光客誘致市民運動」みたいなことを展開すればよい。市民一人が一人の客を呼べば一五〇万人の客がくる計算になる。もちろん老人も赤子もいるためそうはなるまいが、神戸市民発で全国に訴える姿勢が大切ということである。

「そうは言っても何を売り物にすればよいのか、神戸の魅力、宝はくずれてしまった」。そんな声が聞こえそうである。でもここは聞き直るしかあるまい。崩れた宝をみせるのである。それを新しい宝とする発想の転換が必要である。もうその時期にきている。地震災害の実態を見て見んでもらう。すなわち「見物」ではなく「見学」を強調し、そのことが神戸に対する最大の支援であることを声を大にして叫ぶのである。

日銀では防災をテーマにした全国会議を神戸で開催したが、参加者殆どが「百聞は一見に如かず」として「家族にも神戸を見せておくべき」との感想を漏らしていた。大震災に遭遇した成々の貴重な体験、これは宝である。そう、神戸には間違いなく人を呼べる宝がある。オリックスという新しい宝もある。皆で自信をもって人を呼ぼう！ 宝を生かさそう！

△えんどう・かつひろ▽昭和二〇年生まれ。四三年早大政経学部卒。日銀へ。以来東京を中心に北九州、名古屋、神戸、札幌、青森と北から南まで日本縦断。引越しの経験豊富。灘区の社宅で震災に遭遇。金融面での混乱回避に奔走。目下「神戸復興支援！ 何かを支店会」を結成するなど、経済復興に向け鋭意活動中。



# ひとり“控室” 書類に埋もれて

神戸市役所一号館、二十六階に、我が無所属議員控室がある。

他の部屋には、〇〇議員団、だの、会派の名称そのものが書かれているのに、なんで、無所属だけが控室やねん。

今日も今日とて、この控室で、私は書類を見ている。なんとおびただしい紙の量。



＜神戸市会議員＞

小山乃里子の

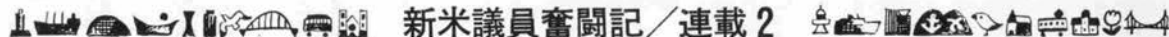
議員になって三カ月あまり。机の上、引き出し、書棚の中。毎日届けられる書類で埋まっていく。

神戸市会の会議録。平成七年度神戸市各会計予算。『こうべ』の市民福祉総合計画。各局から出される事業概要。神戸市復興計画。財政のあらまし…。

書き出したらきりがない。

その上に、例えば「神戸市降雨情報システムの使用開始」だとか「オリックス優勝記念NEW Uラインカード発売」のお知らせが届く。

これらの、冊子、書類は、例外なく横書きである。毎日読む、新聞、雑誌、単行本、そして、放送にのいての、ニュースやCMの原稿、これは例外なく縦書



## 新米議員奮闘記／連載2

きだった。

横書きの文章など、大学卒業以来なのだ。

百歩譲って、横書きの書類をけん命に読むとする。

と、必ず、わけのわからないカタカナ文字に出くわす。

「インフラ」「インナーシティ」「リストラクチャリング」エトセトラ。

「マルチメディア文化都市をめざし…」と書かれても、おおよそイメージがふくらまない。インフレは知っているが、インフラとはなんぞや。英和辞書をひく前に、これに頼ろう。

「日本語になった外国語辞典」。ありました。経済活動の基盤となる、交通・運輸・港湾などの施設。なるほど。意味がわかれば、カタカナ四文字の方が簡単かもしれない。

震災で、ガス、水道、電気がストップして「ライフライン」という言葉が市民権を得たように、「インフラ」もそのうち、誰でも口にするようになるのだから。

などと考えていたら

「先生、今度の市会の資料です」

ポンと机の上に置かれた冊子。

「会議事件（平成七年第三回定例会市会）」決算第一号、平成六年度神戸市下水道事業会計決算。

決算八号まで、この調子で各事業の会計決算が並び、そのあと、予算が五項目。

これは見事に、数字と漢字のオンパレードだった。こうやって、目が疲れるから、議員の部屋は、ながめのいい所にあるのかもしれない。

△こやま・のりこ「ラジオ関西アナウンサーを経てフリーパーソナリティー。毎日放送『ごめんやす馬場章夫です』を十二年間担当。ラジオ関西で『ピパタカラジェンヌ』も。神戸市会議員（無所属）。東灘区在住。」

（イラスト・高橋 孟）